

■（１８３）総選挙で実感、国会の風化と被災地の冷めた目

有権者の半数近くが棄権した総選挙で、岩手県の小選挙区は解散前の議員がすべて当選した。民主２人と自民１人、生活１人。落選した自民３人も比例代表で復活した。彼らの被災地での訴えは、異口同音に復興の加速だった。復興の遅れる地にむなしく響いた。

選挙取材では常に、有権者の期待や願いを聞く。普段は遠い政治家が、地元の声を聞くとするいい機会だからだ。「職場」が壊滅的な被害を受けた漁協組合長も訪ねた１人だった。「復興に向けて政治に期待することは何か」との問いかに、組合長はまずあきれたような表情を見せた。「復興が遅いというが、政治家に言ってもだめ。結局は役所だよ」。これまで視察に訪れた政治家には何度も窮状を訴えた。前向きな返事をくれるが、市町村から県、省庁とつながる役所の手続きで結局、長い時間がかかってしまうという。「あえて言うなら、この強固な役所のシステムを打破できる政治家が出てきて欲しい」と語った。

震災から３年９カ月。野党候補は「国会では風化が進んでいる」と明かし、被災者には冷めた目が広がる。それに抗う責任は報道にもあると実感する選挙だった。（山）